

[B年] 待降節第2主日(2023年12月10日)**【旧約聖書日課】列王記上 22章(1~5) 6~17節**

1三年間、アラムとイスラエルの間には戦いがなかった。2三年目になって、ユダの王ヨシャファトがイスラエルの王のところに下って来た。3イスラエルの王は家臣たちに、「お前たちはラモト・ギレアドが我々のものであることを知っているであろう。我々は何もせずにいて、アラムの王の手からそれを奪い返せないままにいる」と言った。4それから、ヨシャファトに向かって、「わたしと共に行って、ラモト・ギレアドと戦っていただけませんか」と尋ねた。ヨシャファトはイスラエルの王に答えた。「わたしはあなたと一体、わたしの民はあなたの民と一体、わたしの馬はあなたの馬と一体です。」5しかし同時にヨシャファトはイスラエルの王に、「まず主の言葉を求めてください」と言った。

6イスラエルの王は、約四百人の預言者を召集し、「わたしはラモト・ギレアドに行って戦いを挑むべきか、それとも控えるべきか」と問うた。彼らは、「攻め上ってください。主は、王の手にこれをお渡しになります」と答えた。7しかし、ヨシャファトが、「ここには、このほかに我々が尋ねることのできる主の預言者はいないのですか」と問うと、8イスラエルの王はヨシャファトに答えた。「もう一人、主の御旨を尋ねることのできる者がいます。しかし、彼はわたしに幸運を預言することがなく、災いばかり預言するので、わたしは彼を憎んでいます。イムラの子ミカヤという者です。」ヨシャファトは、「王よ、そのように言うてはなりません」といさめた。9そこでイスラエルの王は一人の宦官を呼び、「イムラの子ミカヤを急いで連れて来るように」と言った。

10イスラエルの王はユダの王ヨシャファトと共に、サマリアの城門の入り口にある麦打ち場で、それぞれ正装して王座に着いていた。預言者たちは皆、その前に出て預言していた。11ケナアナの子ツイドキヤが数本の鉄の角を作って、「主はこう言われる。これをもってアラムを突き、殲滅せよ」と言う。12他の預言者たちも皆同様に預言して、「ラモト・ギレアドに攻め上って勝利を得てください。主は敵を王の手にお渡しになります」と言った。

13ミカヤを呼びに行った使いの者は、ミカヤにこう言い含めた。「いいですか。預言者たちは口をそろえて、王に幸運を告げています。どうかあなたも、彼らと同じように語り、幸運を告げてください。」14ミカヤは、「主は生きておられる。主がわたしに言われる事をわたしは告げる」と言って、15王のもとに来た。王が、「ミカヤよ、我々はラモト・ギレアドに行って戦いを挑むべきか、それとも控えるべきか、どちらだ」と問うと、彼は、「攻め上って勝利を得てください。主は敵を王の手にお渡しになります」と答えた。16そこで王が彼に、「何度誓わせたなら、お前は主の名によって真実だけをわたしに告げるようになるのか」と言う。17彼は答えた。「イスラエル人が皆、羊飼いのいない羊のように山々に散っているのをわたしは見ました。主は、『彼らには主人がないな

い。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ』と言われました。」

【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章19節~2章3節

1 19こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。20何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。21なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。

2 1かつて、民の中に偽預言者がいました。同じように、あなたがたの中にも偽教師が現れるにちがいません。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。自分の身に速やかな滅びを招いており、2しかも、多くの人が彼らのみだらな楽しみを見做っています。彼らのために真理の道はそしられるのです。3彼らは欲が深く、うそ偽りであなたがたを食物物にします。このような者たちに対する裁きは、昔から怠りなくなされていて、彼らの滅びも滞ることはありません。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章36~47節

36しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。37また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。38また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。39あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。40それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしな。41わたしは、人からの誉れは受けない。42しかし、あなたたちの内には神への愛がないことを、わたしは知っている。43わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、あなたたちは受け入れる。44互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしなあなたたちには、どうして信じることができようか。45わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。46あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いてあるからである。47しかし、モーセの書いたことを信じないのであれば、どうしてわたしが語ることを信じることができようか。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 22章(1~5) 6~17節

「アラムとイスラエルの間には戦いがないうち三年が過ぎた。

²しかし三年目になってのことである。ユダの王ヨシヤファトが、イスラエルの王のもとに下って来たとき、³イスラエルの王は家臣たちに、「お前たちは、ラモト・ギルアドが我らのものであることを知っているだろう。それなのに、我々はアラムの王の手からそれを取り返そうともしないままでいる」と言い、⁴ヨシヤファトに、「私と一緒にラモト・ギルアドへ戦いに行っていただけませんか」と呼びかけた。ヨシヤファトはイスラエルの王に、「私とあなたは一つ、私の民とあなたの民は一つ、私の馬とあなたの馬は一つです」と答えた。⁵さらにヨシヤファトはイスラエルの王に、「どうかまず主の言葉を伺ってみてください」と言った。

⁶そこでイスラエルの王は、約四百人の預言者を集め、「私はラモト・ギルアドに戦いに行くべきだろうか、それともやめるべきだろうか」と尋ねた。彼らは、「攻め上ってください。主がこれを王の手に渡されるでしょう」と答えた。⁷ヨシヤファトが、「ここには、私たちが主に伺いを立てることのできる預言者は、ほかにいないのですか」と尋ねると、⁸イスラエルの王はヨシヤファトに答えた。「もう一人、主に伺いを立てることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。イムラの子ミカヤという者です。」ヨシヤファトが、「王様、そんなことを言うてはいけません」と言うと、⁹イスラエルの王は一人の役人を呼び出し、「イムラの子ミカヤを急いで連れて来い」と命じた。

¹⁰さて、イスラエルの王とユダの王ヨシヤファトは、サマリヤの門の入り口にある麦打ち場で、それぞれ王の衣を身に着けて王の座に座っていた。預言者たちは皆、二人の前で預言していた。¹¹その時、ケナアナの子ツィドキヤが鉄の角を作って、「主はこう言われる。『これをもってアラムを突き刺し、全滅させよ』』」と言った。¹²他の預言者たちも皆同じように預言して、「ラモト・ギルアドに攻め上って勝利を手にしてください。主はこれを王の手に渡されます」と言った。

¹³ミカヤを呼びに行った使いの者は、彼にこう告げた。「預言者たちは口をそろえて王にとって良いと思われることを告げています。どうかあなたも、彼らの一人が言うように、良いと思われることを告げてください。」¹⁴だがミカヤは、「主は生きておられる。私は、主が告げられることを語る」と言って、¹⁵王のもとに行った。王が、「ミカヤ、私たちはラモト・ギルアドに戦いに行くべきだろうか。それともやめるべきだろうか」と尋ねると、「攻め上って勝利を手にしてください。主はこれを王の手に渡されます」と答えた。¹⁶王が、「何度誓わせたなら、お前は主の名によって、ただ真実だけを私に告げるようになるのか」と言うと、¹⁷ミカヤは答えた。「私

は全イスラエルが、羊飼いのいない羊の群れのように、山々に散らされているのを見ました。主は言われます。『彼らには主人がいない。それぞれ自分の家に無事に帰らせなさい』」。

ペトロの手紙二 1章19節~2章3節

¹⁹こうして、私たちは、預言の言葉をより確かなものとして持っています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗いところに輝く灯として、この言葉を心に留めておきなさい。²⁰何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。²¹預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、人々が聖霊に導かれて、神からの言葉を語ったものだからです。

²²しかし、民の間に偽預言者も現れました。同じように、あなたがたの間にも偽教師が現れることでしょう。彼らは滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を否定して、自らの身に速やかな滅びを招いています。²³しかも、多くの人が彼らの放縦を見倣い、そのために真理の道がそしりを受けるのです。²⁴彼らは欲に駆られ、嘘偽りであなたがたを食物にします。この者たちに対する裁きは、昔から滞りなく行われており、彼らが滅ぼされないままではありませぬ。

ヨハネによる福音書 5章36~47節

³⁶しかし、私にはヨハネの証しにまさる証しがある。父が私に成し遂げるようにお与えになった業、つまり、私が行っている業そのものが、父が私をお遣わしになったことを証ししている。³⁷また、私をお遣わしになった父が、私について証しをしてくださる。あなたがたは、父の声をまだ聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。³⁸また、あなたがたは、父のお言葉を自分の内にとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたがたは信じないからである。³⁹あなたがたは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を調べているが、聖書は私について証しをするものだ。⁴⁰それなのに、あなたがたは、命を得るために私のもとに来ようとしません。

⁴¹私は、人からの栄光は受けない。⁴²しかし、あなたがたの内には神への愛がないことを、私は知っている。⁴³私は父の名によって来たのに、あなたがたは私を受け入れない。もし、ほかの人が自分の名によって来れば、その人を受け入れるだろう。⁴⁴互いに相手からの栄光は受けるのに、唯一の神からの栄光は求めようしないあなたがたには、どうして信じることができようか。⁴⁵私が父にあなたがたを訴えるなどと考えてはならない。あなたがたを訴えるのは、あなたがたが頼りにしているモーセなのだ。⁴⁶もし、あなたがたがモーセを信じているなら、私を信じたはずだ。モーセは、私について書いているからである。⁴⁷しかし、モーセの書いたことを信じないなら、どうして私の言葉を信じることができようか。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・12月10日「待降節第2主日」の日課主題は「旧約における神の言」。

・旧約聖書日課は、「列王記上」から、預言者ミカヤの伝承逸話を伝える箇所。使徒書日課は、「ペトロの手紙二」から、預言に留意し偽教師に警戒すべきことを説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「聖書」についての見解を主イエスが述べる箇所。

旧約日課(列王記上 22章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の最終巻で、「イスラエル正史物語」のソロモン王の時代からユダ・イスラエル両王国滅亡までの時代を扱っている。バビロン捕囚後の正典編纂が南王国ユダの末裔集団(王族貴族、祭司)によって為されたものであるため、基本的には南王国の歴史観で構成されているが、ペルシア帝国支配下での世俗王権を伴わない「ユダヤ宗教共同体」再建事業の一環であり、南北両王国史における王政そのものに懐疑的である一方で、宗教指導者としての「預言者」を神の代理人として王の上位に位置づけようとする視座を持っている。その際に、南北両王国で、実際上の「預言者」の立ち位置が異なるものであったことが前提となっている。南王国ユダでは、ソロモン王の時代に王立神殿が建立され、王権の中に完全に組み込まれた祭司集団が維持され、そこから王の助言者としての宮廷預言者が招致されていた。他方、北王国イスラエルでは、各地に古来の聖所を拠点とする宗教的地方権力が存在しており、当初、王権と諸聖所祭司集団との関係は不安定であったが、オムリ王朝時代にフェニキア系祭司集団(バアルの祭司・預言者!)が王権と結びついて権勢を奮ったことに対して、エリヤを筆頭とするような諸地方聖所祭司集団が抵抗を見せ、エリヤの後継を自負するエリシャによって諸祭司集団を糾合する形でオムリ王朝転覆、軍司令官イエフを担いだ新王朝が成立している。このイエフ王朝は、ベテルをはじめとする諸地方聖所祭司集団の支持と共存関係によって約100年間続いた。ところが、アッシリアの侵攻によって北王国が滅亡すると、諸聖所祭司集団から同王国の宮廷預言者となっていた者たち(王宮関係者)の一部は、亡命先の南王国ユダの王宮・祭司集団に迎えられ、南王国祭司集団(宮廷預言者ら)に思想的な影響を与えるようになったと考えられる。その時代に登場したのが南王国の宮廷預言者「イザヤ」であり、「神の言葉の代弁者として王に直言する預言者」という理想像がイザヤのイメージに付与されることとなったのだろう。日課箇所に描かれる預言者「ミカヤ」は、オムリ王朝の王権に対抗していた預言者集団の一人であるが、同時に描かれる南王国ユダの王ヨシヤファトは、預言者に対して謙遜な態度の王として描かれている(7~9節)。

・日課箇所の逸話の背景となっているのは、北王国イスラエルとアラム・ダマスコ王国との紛争である。両国は、長年この地域の覇権を争う関係にあったが、大國アッシリアに対する抵抗では諸都市国家を巻き込んだ大同盟を組む関係でもあった。前853年にシャルマネセル3世率いるアッシリア軍が西進してきた際にも同盟を組み、アッシリア軍を退却させているが(「カルカルの戦い」として知られる)、直後に両国は対立し、その戦闘中にイスラエル王アハブは戦死している。この「カルカルの戦い」に際して同盟には12の都市国家が名を連ねていたことがアッシリアの碑文によって知られているが、そのリストに南王国ユダおよびその王の名は記されていない。おそらく、当時のユダ王国は、イスラエル王国の属国とみなされていたのだろう。南王国の歴史観からは、そのような従属関係は当然容認できないことであっただろうが、日課箇所でも南王国ヨシヤファト王がイスラエル王(アハブ)と行動を共にしているのは、そのような事情を反映している。

使徒書日課(Ⅱペトロ1章)

・「ペトロの手紙二」は、「手紙一」と共に「使徒ペトロ」に帰される書簡文書。「手紙一」が端的に差出人名を「使徒ペトロ」としているのに対して、「手紙二」は「使徒であるシメオン・ペトロ」としており、彼の本来の名「シモン(シメオン)」を付記している。「シメオン」は、イスラエル十二部族に数えられる部族名であるが、王国時代には「ユダ族」を盟主とする南王国に従属する部族になっていたと考えられる。「シモン/シメオン」の名の人物は、新約中に多数現れる。「手紙二」は、「手紙一」と共に、現代の聖書学者によってペトロ自身の真筆性に疑義が呈されているが、殊に「手紙二」は、古代教父の時代から「正典性」に疑義が呈され続け、最終的に主流教会が一致したのは7世紀末。

・本書簡は、いわゆる「終末の遅延」問題によって動揺している信者に対して、「聖書」の「預言」に留意して使徒たちの教えに留まるべきこと、「偽教師」の語る異なる教えを避けるべきこと、などが主題となっている。ここで「偽教師」は、かつての「偽預言者」に相当する者として位置づけられている(2:1)。この「偽預言者」という表現は、新約文書中で11例が確認されるが、多くの場合、1世紀当時の状況の中で信者を惑わす者として取り上げられており、本書簡のように「預言者(プロフェテース)」を「旧約」時代の者に限定していない(ルカ6:26は本書簡と同じ用法)。初期教会では、「預言者」を「洗礼者ヨハネ」までとする理解が徐々に広まり、教会共同体における役割や職位としては代わりに「教師(ディダスカロス)」が用いられるように変化していったのだろう。「教師」は、主イエスにも充てられる用語で、ユダヤ教の「ラビ」に相当する用語として用いられるようになっていた。

・1節「異端(ハイレーシス)」は、「パウロ書簡」では「仲間割れ」と訳されている(Ⅰコリ11:19、ガラ5:20)。

福音書日課(ヨハネ 5 章より)

・日課箇所を含む 5 章は、「ユダヤ人の祭り」(1 節)を場面設定とする一連の逸話と対話で構成されている。この場面は、いわゆる「ベトザタの池での癒し」の出来事を発端として、主イエスとユダヤ人たちの間で、「安息日」の問題のみならず、主イエスの神学的権威に関する問題(5:18)が議論されることへと展開している。「ヨハネ福音書」で、主イエスが「ユダヤ人」と対立し始めるのは、この場面からである。

・日課箇所は、「(父の)御子」であることを称する主イエスの権威が、何によって根拠づけられるのかが論じられている。

・36 節「証し(マルテュリア)」は、「ヨハネ福音書」で特異的に用いられている用語で、この名詞形では、新約 37 例中 14 例が本福音書(1 章、3 章、5 章、8 章など)に、また 7 例が「ヨハネの手紙」一および三にみられ、さらに「ヨハネ」の名を冠した「黙示録」にも 9 例がみられる。この語は、教会では歴史的に「殉教」を意味する語として用いられるようになった。

・41 節および 44 節「誉れ(ドクサ)」は、「栄光／榮華／繁栄／名誉」などとも訳される語で、元来はどちらかといえば世俗的な意味合いが強い。「ヨハネ福音書」は、それを踏まえながら、「神的な栄誉」を意味する語として再定義しようと試みている。なお、この語は、「頌栄」と訳される「ドクソロジー」の語源。

・44 節「信じる(ピステューオー)」は、本福音書で特異的に用いられ、新約中 255 例のうち、マタイ 11 例、マルコ 10 例、ルカ 9 例に対して、本書には 98 例がみられる。他の文書で用例が多いのは、「使徒言行録」36 例、「パウロ書簡集」54 例など。しかし、本書は「信仰(ピステイス)」を必ずしも積極的に扱っていない。

来週の誕生日 (12 月 10 日～16 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-229 番「いま来たりませ」(= II 96)は、M・ルターの作詞となっているが、原詞は 4 世紀のミラノ司教アンブロシウスのラテン語賛歌「Veni Redemptor gentium (おいでください、異邦人の救い主)」に基づく。曲も、アンブロシウスの賛歌に付けられたグレゴリオ聖歌を原曲にルターが編曲。ルターの関わった最初の讃美歌集(1524 年)に所収。

・21-231 番「久しく待ちにし」(= I 94)は、9 世紀のアンティフォン(交唱聖歌)に基づいて 13 世紀ごろに再構成、18 世紀に現在の形になった。原曲は 15 世紀フランスの女子修道院の歌集に見られる。

・21-243 番「闇は深まり」は、20 世紀前半ドイツで活躍した作家・宗教詩人ヨッヘン・クレッパが、ユダヤ人女性と結婚してナチスから迫害を受けていた時期に発表した詩による讃美歌。彼は、家族が強制連行される前夜に家族と共に自死している。曲は、20 世紀を通じてドイツで教会音楽家・音楽教師として活動したベツォルトの作曲。

21-229 「いま来たりませ」

Nun komm, der Heiden Heiland

1. Nun komm, der Heiden Heiland, / Der Jungfrauen Kind erkannt! / Dass sich wundre alle Welt, / Gott solch' Geburt ihm bestellt.
2. Nicht von Mann's Blut noch von Fleisch, / Allein von dem Heil'gen Geist / Ist Gott's Wort worden ein Mensch / Und blüht ein' Frucht Weibesfleisch.
3. Der Jungfrau Leib schwanger ward, / Doch blieb Keuschheit rein bewahrt, / Leucht't hervor manch' Tugend schön, / Gott da war in seinem Thron.
4. Er ging aus der Kammer sein, / Dem kön'glichen Saal so rein, / Gott von Art und Mensch ein Held, / Sein'n Weg er zu laufen eilt.
5. Sein Lauf kam vom Vater her / Und kehrt' wieder zum Vater, / Fuhr hinunter zu der Hoell' / Und wieder zu Gottes Stuhl.
6. Der du bist dem Vater gleich, / Führ' hinaus den Sieg im Fleisch, / Dass dein' ew'ge Gott'sgewalt / In uns das krank' Fleisch erhalt'.
7. Dein' Krippe glänzt hell und klar, / Die Nacht gibt ein neu Licht dar, / Dunkel mus nicht kommen drein, / Der Glaub' bleibt immer im Schein.
8. Lob sei Gott dem Vater g'tan, / Lob sei Gott sein'm ein'gen Sohn, / Lob sei Gott dem Heil'gen Geist / Immer und in Ewigkeit!

21-231 「久しく待ちにし」

Veni, Veni, Emmanuel

1. Veni veni, Emmanuel / captivum solve Israel, / qui gemit in exsilio, / privatus Dei Filio. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
2. Veni, O Sapientia, / quae hic disponis omnia, / veni, viam prudentiae / ut doceas et gloriae. / Gaude! Gaude! / Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
3. Veni, veni, Adonai, / qui populo in Sinai / legem dedisti vertice / in maiestate gloriae. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
4. Veni, O lesse virgula, / ex hostis tuos ungula, / de spectu tuos tartari / educ et antro barathri. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
5. Veni, Clavis Davidica, / regna reclude caelica, / fac iter tutum superum, / et claude vias inferum. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
6. Veni, veni O Oriens, / solare nos adveniens, / noctis depelle nebulas, / dirasque mortis tenebras. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
7. Veni, veni, Rex Gentium, / veni, Redemptor omnium, / ut salvas tuos famulos / peccati sibi conscios. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!

21-243 「闇は深まり」

Die Nacht ist vorgedrungen

1. Die Nacht ist vorgedrungen, / der Tag ist nicht mehr fern! / So sei nun Lob gesungen / dem hellen Morgenstern! / Auch wer zur Nacht geweinet, / der stimme froh mit ein. / Der Morgenstern bescheinet / auch deine Angst und Pein.
2. Dem alle Engel dienen, / wird nun ein Kind und Knecht. / Gott selber ist erschienen / zur Sühne für sein Recht. / Wer schuldig ist auf Erden, / verhüll nicht mehr sein Haupt. / Er soll errettet werden, / wenn er dem Kinde glaubt.
3. Die Nacht ist schon im Schwinden, / macht euch zum Stalle auf! / Ihr sollt das Heil dort finden, / das aller Zeiten Lauf / von Anfang an verkündet, / seit eure Schuld geschah. / Nun hat sich euch verbündet, / den Gott selbst ausersah.
4. Noch manche Nacht wird fallen / auf Menschenleid und -schuld. / Doch wandert nun mit allen / der Stern der Gotteshuld. / Beglänzt von seinem Lichte, / hält euch kein Dunkel mehr, / von Gottes Angesichte / kam euch die Rettung her.
5. Gott will im Dunkel wohnen / und hat es doch erhellt. / Als wollte er belohnen, / so richtet er die Welt. / Der sich den Erdkreis baute, / der lässt den Sünder nicht. / Wer hier dem Sohn vertraute, / kommt dort aus dem Gericht.